籠女

経済学部
経済学科2年
木地本　茜

馬の蹄が地を叩く音。怒っているような声。何かあったのだろうか。

「●●●、お前はここに隠れておいで」

かかさまはそう言って私を大きな大きな籠を被せた。籠の目は小さくて、幽かな光がわかるくらい。動いてはダメ、出てはダメよと言い聞かせ、かかさまはどこかへ走っていった。

片目を瞑り、籠の目から外が見れないかと目を凝らす。しばらくもしない内に目が慣れた。かかさまは見えるかな。

「ひ、げぇっ」

かかさまは引き攣った悲鳴と、蟇の潰れた声を上げて棒のようにばったんと倒れた。倒れた反動で足下に置いてあった私の茶碗がかたり、と音を立てた。

かかさまから血が滾々と流れ出ている。それはととさまが兎を狩ってきて血抜きをしているところと相違なかった。

かかさまと目があった。でもその目は虚ろで、息絶えた鹿の眼と相違なかった。

息絶えた。そうか、かかさま死んだのか。よく見ればかかさまの近くにととさまも同じ目をして倒れてる。そしてその側に知らないお侍がいた。右手に握った刀にべっとりと、怨めしそうに血糊がついている。

「金目のもんはなんもなさそうだな。ちぇっ、時化てやがる」

そいつはちらりと私のいる籠を睨みつけたが、鶏はいらね、とそのまま家を出ていった。

いなくなった。そこで初めて身体がすぅと冷えてきた。かたかたと震えるし歯の根が合わない。出ていいよと言ってくれるかかさまはもう喋らない。こんなところにいたのかと豪快に笑うととさまも動かない。

このままでは押しつぶされてしまいそうだと、身体を縮こめた時。それまで光の射していた籠の目に影が差した。さっきのお侍かと思ったが、見える服装はさっきのお侍とは違った。錆色のマタギ装束を着て、顔は笠で出来た影で見えない。だがこちらをじっと見つめていることは何故かわかった。

「ここの家の者か」

低く腹の底に響くような声だが、怖いとは感じなかった。だが、突然現れた彼の存在に圧倒されて返事をしようにも喉が張り付いて声が出ない。

「まあいい。己は以前よりこの村の者達に良くしてもらっていたモノだ。だが今日来てみれば誰も息をしていないので驚いた。お前は一人になっただろうがそれはまだ幸運なことだろうから、そのまま暫く待っていなさい。近くの村に助けを求めに行ってやるから」

そう言って背を向けた彼は家から出ていこうとする。陰りが遠ざかって、籠に再び光が差し始めた。

「待って、ください」

「なんだ」

彼は立ち止まり、ぞり、ぞりと音を立てて数歩

こちらに戻った。
「私、貴方といたいのです、どこかに行くなら一緒に行ってもいいですか？」
　できるだけ丁寧にゆっくりと言うと、彼は獣のように唸った。決して脅すような色はなかったが、彼にとって都合が良くないことはわかった。
「助けを求めに行くと言っても、己は人様に見せられるような容姿をしていない。お前の目にも己の容姿は耐え難いものだろうから、ここで待っていてもらえはしないか」
　どうやら彼は自分の姿を見られるのが嫌らしい。
「近くの村には親戚がいません。おじじもおばばもこの村の生まれで、外に出たのも数えるくらいです。それなら私は貴方といたいです」
　不思議と、この顔の見えない彼が気になってしょうがなかった。私に気づいた時の少しほっとした声も、人には出せそうにない唸りも。貴方は誰なのと訊いてしまいたかったけれども、訊いたところで彼は姿を消すだけに思えて訊くことができないでいた。
「そうか……一つ条件を飲んでくれるなら連れて行こう」
「条件？」
「己にお前の目を封じさせてほしい。潰すのではないから痛みはないが、己が術を解くまで目は見えなくなる」
「潰さなくてもいいのですか」
　そう訊くと彼は少し怒気を含んだ唸りを上げた。
「己は無闇やたらに人を傷つけたりはしない」
「ご、ごめんなさい」
　しかし素直に謝ればもういいと言ってくれた。
「本当にいいのか」
「はい」
　返事をすると、目の辺りが囲炉裏に近づきすぎた時みたいに熱くなり、熱が引くと籠の目から幽かに差していた光がなくなっていて、見えなくなったことを知った。ぺちぺちと目の周りに触れてみると目玉はそのまま収まっていた。
　籠を取り去る音がして、肩に手を置かれた。服越しでもわかる大きな手だ。重ねるように触れると骨のはっきりわかる肉厚でごつごつとした手だった。ひんやりとしていて人の肌よりも滑らかだ。彼が何も言わないのをいいことに両手で持って触れた。人の指を二本束ねたくらいに太い指が三本。鉤爪があるが、尖らせず先は丸められている。
「爪は鋭くないのね」
「尖っていては物を持った時に傷つけてしまうからな」
　声のする方へ手を伸ばそうとすると、やんわりと手首を掴まれて拒まれた。
「お前は聡いようだから己が何かもうわかっているだろう。そのお前が己の顔に触れたら造形もわかってしまうだろう。それでは見られるのと変わりない」
　そろそろ行こうと彼は言って、私を抱え上げると歩き始めた。
「どこに行くの」
「己の住む村だ。己のようなモノだけの村だ」
「そう。あとオレさん、名前を教えて」
「名乗り遅れたな。己は銀鼠、銀の鼠と書く」
「銀鼠さん。よろしくね、銀鼠さん」
　銀鼠さんの住むという村までは山の中を通っていった。見えなくても、葉の潰れる青い匂いと川の音が場所を教えてくれていた。着いたぞ、という声の後から何かを通り抜ける感覚があった。訊けば村の入り口を通ったからだと教えてくれた。
「おかえり、銀鼠の旦那。何か連れているね。これはなんだい？」
　妙齢の女性の声が顔の向かいから覗き込んでいた。
「椚、近いぞ離れろ」

「ああもうつれないんだから」
　椚と呼ばれたその女性は不満げにだが離れていった。そんなやりとりの間に、周囲に気配が増えていた。何人もの人に顔を覗かれている気がした。
「下の村が賊に襲われたようだ。生き残っていたこの子がついて来たいと言うので連れてきた」
「そりゃあ、可哀想に」
　甲高い声の男がそう言って私の髪を梳いた。
「寂しかろう、見えないわっしらが怖いだろうが。嫌になったらいつでも銀鼠に言いなさいな」
　続けて言う男の言葉に首を振る。
「怖くない。だって優しい銀鼠さんの住んでいる村の人だもの」
「ほう……そうけそうけ、そんりゃ嬉しいね。わっしは蟋蟀。お嬢さんは何て言うんだい」
　蟋蟀さんの言葉で気づいた。
「名前……なんだっけ」
「思い出せないのか」
　銀鼠さんの言葉に頷く。最後に呼ばれた時の記憶も霞がかって思い出せない。
「なら旦那がうんと可愛らしい名前をつけてあげればいいじゃない」
「あ、それがいい！　銀鼠さん、名前付けて」
「己がか？」
　銀鼠さんは暫く唸った後カゴメ、と呼んだ。
「カゴメ？」
「籠の女と書いて、カゴメ。どうだ？」
　椚さんが態とらしくため息を吐いた。
「もっとマシなの思いつかないのかい？」
「そんなこと言われてもな……」
　困った銀鼠さんの声が可笑しい。
「私はカゴメがいいよ、銀鼠さん」
「子供が気を遣うもんじゃありませんよ」
「ううん。本当にカゴメがいい」
「そう？　本人がいいならいいけども」
　そう言って椚さんが私の頭を優しく撫でてくれる。私がカゴメになった日。私の誕生日だ。

　それからの十年はあっという間に過ぎていった。人間の私を誰も邪険に扱ったりせず、寧ろ常に気にかけて誰かしらが側にいてくれた。
　銀鼠さんはいくつかの村を巡って害獣を退け、その謝礼という形でお供え物を貰って暮らしていた。普段銀鼠さんの家に住まわせてもらっていても、その仕事に行く間は椚さんの家に居させてもらった。
　村に来て十回目の誕生日が来た。誕生日はみんなが集まっておめでとうと言ってくれて、甘い木の実や人間の村からくすねてきた鶏、服などを貰って宴会のようなことをしてくれる。だが、今年は少し違った。例年よりもみんなが嬉しそうにそわそわしているのがわかった。
「みんな落ち着かないようだけど、何かあったの？」
「いいや、なんも。今年でカゴメも十八、人間なら大人だろう」
　椚さんの言葉に、そういえば元いた村だともう大人として扱われていた。だがそれがどうしたのだろう。
「大人になったら番が、人間の世界なら伴侶がいるだろう？　からカゴメのお婿さんを探さないといけないねって話をしてたのさ」
「どんな子がいいかね、カゴメのように綺麗な心をしたのがいいね。わっしらが良いのを見繕ってこようか、それでここで一緒に住めばええ、銀鼠に言って目も戻してもらおうか」
　止めどなく提案する蟋蟀を制す。
「私は銀鼠さんがいいわ」
　それまで騒がしかったみんなが瞬間、静まりかえった。
「カゴメよ、今何と言った」
「銀鼠さんがいいの。離れてないでこっちに来てよ」
　もう一度言うと床板を軋ませながら近づき、

ゆっくりと目の前に座った。暫く黙りが続いたが、口火を切ったのは椚さんだった。
「そうかい？　銀鼠の旦那がいいのかい、物好きなカゴメ。初めて会った時も変わった人の子だと思っていたけども、選りに選って旦那とは。良かったじゃないか旦那、お前のだあい好きなカゴメちゃんがあんたがいいとさ」
　呆れとからかいと祝福の込められた物言いに頬が緩む。
「んむんむ、そうけそうけ。良がったな銀鼠、めでてえ、めでてえ」
　そう言って何か、おそらく銀鼠を叩く蟋蟀を銀鼠が遮る。
「待て待て、己はまだ何も言っていないぞ」
「なんだ、断るのか可愛いカゴメを」
「人間は嫌ですか？」
　椚さんの非難めいた言葉の後に続ける。銀鼠さんは唸ったが、困ったり迷った時の音なので怖くはない。
「カゴメ、本当に己でいいのか」
「はい」
「己はお前が大人になったら術を解いて人の中に帰そうと思っていた。そちらの方が幸せだろうと」
「私はね、貴方がいいの。お外は怖いもの」
　嘘はない。人間に生活を奪われてここに来れたのに、どうしてここから出て行きたいなんて思うだろう。
「そうか。わかった」
　銀鼠さんはそう言って私の手を両手で包み込んだ。相変わらず滑らかでひんやりとした三つ指の大きな手だ。
「旦那のそんな緩んだ顔初めて見たわ。さっさと宴にしちゃいましょ」
「今年は大きな魚が獲れたからね、美味しく料理しちゃおうね」
　それぞれが宴会の支度を始めた頃、銀鼠さんが数日家を空けるからその間椚のところに居ておいでと言った。仕事かと訊いたら違うらしかった。
　宴会が終わり、銀鼠さんが出かけて四日目。帰ってきた銀鼠さんに渡されたのはいつか触れたことのある感触の物だった。
「番はその証として対になる物を身につける。それは海に住む二枚貝で作った首飾りだ」
「貝……ととさまが昔見せてくれたものね」
　貝殻の表に走る凹凸を指でなぞる。仄かに香るのは海の香りだろうか。
「旦那良い色のを見つけてきたわね。カゴメこの貝殻はね、赤と銀を混ぜたような綺麗な色だよ。良かったね」
「へえ……」
　銀鼠さんは目の術を解こうと言ってくれた。私は見えないままで構わなかったけれど、次の満月の夜に解くことになった。
　いよいよ明日が満月だという日の夜。茫々と響く祝詞と悲鳴で目が覚めた。銀鼠さんは起きていたようで、起きあがると共に肩を抱えてくれる。
「銀鼠さん」
「……良くない物が来たようだ。大丈夫だから隠れていなさい」
　今となっては遠い昔の出来事となっていたあの惨事が、その衝撃が再び襲いかかってくる。僅かに力の込められた股の上の握り拳をそっと包むと、銀鼠さんは私を立たせて手を引いた。
　足裏の感触がぺたりとした木の板からざらざらの土へと変わり、土間に導かれたと知る。そこに座れと言われ、その通りにすると聞き覚えのある乾いた音が被せられた。
「カゴメは人間だ、来たのも人間だ。きっと情けで殺したりはしまい。己は守るものだから奴に対抗する手立てを持たん」
　惚けているうちに離れていく気配に、どうしてと手を伸ばす。籠があった。籠を被せられていた。
「ぎんねずさん」
　何でこんなところに入れるんですか、ここは嫌

いですと言おうとした。声は張り付いて出てこなかった。祝詞が近づいてくる。銀鼠さんは、行かなければと言って側を離れていった。

呼べども呼べども返事は聞こえず、何も聞こえなくなって誰もが消えたのだと突きつけられた。

暫くして、地に草履の擦れる音が近づいてきたと思うと私を囲んでいた籠が取り去られたのか淀んでいた空気が動いた。

「やはりおったか。鬼の気の中に人の気が混じっていたから探したぞ。さらわれたのだろう、怖かったろうがもう鬼はおらん」

その老人は自らを旅の祓い師と名乗った。遠方でここに鬼の村があって十年ほど前に村人を殺して幼子をさらったと聞き、それはいかんと自らを奮い立たせて攻め込んだのだと得意げに話した。

「目を奪う呪をかけられているね。これは単純な呪だからすぐ解いてやろう」

老人は何事かをぶつぶつと呟くと二本の指でそれぞれの瞼に軽く触れた。閉じていた瞼が自然と開き、その目に仄暗い夜とにたにたと笑って歯茎を剥き出しにした老人を映した。

「ささ、山を下りよう。麓の村まで送ろう」

差し出されたその嫌にねっとりとした手を掴み、ゆっくりと立つ。

足許に視線を落とすと研がれて温く光る小さな包丁が落ちていた。見えないうちは刃物に触らないよう言われていたことを思い出す。銀鼠さんだけが使っていた包丁。軽快な音を立てて料理をする姿を、結局一度も見ることができなかった。

それを手に取り、柄をしっかりと握る。

「おじいさん」

「んん？　何かな」

そう言って振り返る老人の首に手を走らせる。思ったよりも強い抵抗と固い手応えを感じつつ、その喉笛を断った。

「ひぎっげ、こ、あまめぇ……！」

ギョロリとした目で睨みつけると、左手で裂かれた喉を押さえつつ右手を伸ばして私の着物を掴もうとする。銀鼠さんのくれた手触りの良い着物。見えない私が触ってわかるよう選んでくれた着物。

掴もうとしたその手も切りつける。老人は声にならない悲鳴を上げて、よたよたと数歩後退る。胸を真っ赤に染めて隙間風のような音を立てる姿は凄惨だが、ととさまとかかさまの姿に比べればどうということはないように思えた。

包丁を捨て、銀鼠さんを探しに外へ出る。銀鼠さん、銀鼠さんと声を張るも何も返ってこない。歩く内に蓑を着た複眼の若い男と栗色の着物を着た若い女が斃れているのを見つけた。男から香る笹の香りと女から香る木の蜜の香りが、二人を蟋蟀と椚だと教えてくれた。

二人は村の出入り口に背を向けて倒れていた。村に攻撃してきたあの老人から逃げていたのだろうか。

門の方へ目をやると、大きな獣が門の中央で崩れていた。彼も村人の一員だったのだろうかと思ったが、近くに落ちている物を見て近寄ってみる。

貝の首飾りだ。二枚貝の片側だけの、赤と銀の混ざったような不思議な色をした貝。

大きな獣に歩み寄り、肩を押して仰向けにする。立派なたてがみを持つ、三ツ目の妖怪。造形は耳と毛のない山犬といった感じだろうか。薄く開いた口からは小さな歯が規則正しく並んでいるのが見える。

目を瞑り、両手でその冷たい頬を挟む。頬から鼻先へ向けてなぞると、不思議と涙が溢れてきた。

「銀鼠さん、私は驚きはしても怖がったりしなかったわ。こんなに精悍な面立ちの殿方なんて滅多に、いえ、貴方以外いませんもの」

宙を見つめる銀鼠さんの目に手を翳し、瞼をおろすと安らかに眠る表情になった。

銀鼠さんの首飾りを首にかけ、立ち上がる。誰もいないこの村はもう村ではない。ここに居続けてはいけないとわかった。門の外は鬱蒼と茂る木々でほとんど先など見えない。でもいかなけれ

ばいけなかった。

「さようなら」

傲慢で有名な祓い師が、物の怪の住むという村に行って帰らなかった。その頃近辺の村々では今まで入ってこなかった害獣による被害が出て、人々は、祓い師が行った村には守り神様がいたに違いないと噂した。その守り神様を怒らせたので罰が当たったのだと信じた。

またまた同じ頃。不思議な女の姿が目撃されるようになった。対になっている二枚貝の首飾りを提げたその女は籠を被り、その顔を誰にも見せることがなかったという。ほとんど話さず、口を開くのも名前を聞かれた時に一言、こう呟くのみだった。

「籠女と言います」